

前後十六章百五十五節に再別し、附するに神宮及び主なる官國幣社一覽、神道各教派管長及事務所、佛教各宗派總本山大本山及本山一覽、佛教各宗派檀家及信徒、基督教各派等の十項を以てし、建國以來關東大震災に至るまでの神儒佛耶の四教に關し各時代に於ける諸宗教の起原、教祖、教理、發達、儀式より、道德風俗政治教育に及ぼせる影響を明かにし、加ふるに祈禱、卜占、禁厭、祭典、會式等の俗信仰に至るまでの事實現象を網羅したるものなれども、特に奈良朝時代の六宗昌隆期の記述、近世に於ける神儒佛分離期に關する記述及び明治時代の宗教を説ける邊は注目に價する。(菊版七六六頁、價五・五〇、自修社發行)【以上中村】

●日本神話傳説の研究 高木 敏雄著

本書は故大阪高等學校教授文學士高木敏雄氏の遺稿中神話傳説に關するものを集録したものである、高木氏が我國神話學の開拓者としての功績はこゝに贅言するの要はあるまい、篇を分ちて神話、傳説、説話、童話の四

し、その中に日本神話學の建設、日本神話學の歴史的概観、素盞鳴尊神話に現れたる高天原要素と出雲要素、大國主神の神話、浦島傳説の研究、牛の神話傳説、説話學者としての瀧澤馬琴、日本説話の印度起源に關する疑問日韓共通の民間説話、人身御供論、英雄傳説桃太郎新論等の諸篇あり、其の研究方法にはもつと強く民族心理學に立脚し、且つ歴史的考證に重きをおいたら思はれる節もないではないが、何れにしても我古代史や、土俗學を學ばんとするものゝ必ず一度は眼を通しておかなければならぬものであらう。(菊版五七〇頁岡書院發兌、定價五・〇〇)【徳重】

●近代蒙古史研究

文學博士 矢野 仁一著

著者が近世支那の政治外交史に深造し卓拔着實なる識見を懷きて我が東洋史學界に擅長の命名を博せらるゝは周知のこゝに屬し、學者は勿論政治外交家より實業家に至るまで皆其の卓見を聞かむと欲して翹望するや久しい本書は十數年來燃犀の爛眼を以て潛心注意せられし近代

蒙古の歴史的研究の蘊蓄の一端を公にせられたもので眞に有益なる快著と謂ふべきである、凡て三十四章に分れ蒙古と清朝との複雑なる政治的經濟的關係より宗教的關係を論述し、清朝末の蒙古の新政施行より露西亞との關係を探り露支蒙相互の關係を論評し一九一一年の蒙古獨立の顛末外蒙古獨立宣言後の露支蒙關係を説明し最後に最近の形勢の激變を述べ、複雑せる政治的經濟的關係を述ぶるに豊富なる史料を經こし高邁なる識見を緯こし讀む者をして此の一擧を嘗めては更に全羊を思はしむるもの、その名は學術的論著なりと雖も同時に我が國策の將來にこりての經世の最良參考書、學者は勿論苟くも支那蒙古問題を論じ我が國の將來を考ふる人士には必ず再讀三讀するを要すべき寶典なりとする。(菊版四六八頁、京都寺町丸太町弘文堂、價四・五〇)【那波】

● 燕吳載筆

文學士 那波 利貞著

大正八年秋、著者禹域に遊び、北燕京より南錢塘に至る。歸來久しく其紀行を「歴史と地理」に連載せられしが

未だ全程の半に達せず、依て其全般を簡明に拔萃したるもの乃ち是。著者の博識なる、沿道各地の古今沿革風俗人物を叙述するに極めて詳細にして、雜ふるに身親しく經驗せる實地の感想を以てすれば、後に此地に遊ぶ者の懷中に缺くべからざる好伴侶なるを疑はず。(四六版五〇八頁、同文館發行、價三・八〇)【宮崎】

The Cambridge Ancient History. Edited
by J.B.Bury, F.B.A., S.A.Cook, Litt.D.,
F.E.Adcock. Volume II. The Egyptian
and Hittite Empires to c. 1000 B. C.
(Cambridge: University Press; New York:
Macmillan Company. 1924.p.p. xxv. 751,
35s.)

ケムブリッジ古代史は歐洲民族史の第一部として計畫されしものにして、その第三部をなす近世史十三卷(一九〇二—一九一一)は既に完成し、第二部をなす中世史は出版繼續中にして昨年第四卷を世に出してをる。近世史はアクトン卿・中世史はビュリー教授の意匠になり